一　資料解説

はじめに

鳥取県立図書館が所蔵する尾崎放哉関係資料は、資料の伝来や収蔵にいたる過程等によって大きく三つの資料群に分類される。①鳥取県立図書館が収集してきた資料、②『放哉』（昭和三十九年、層雲社）の著者村尾草樹氏が収集した資料、③古川幸雄旧蔵資料である。

１　資料群の説明

鳥取県立図書館収集資料

所蔵の経緯

まず、本資料群が当館に所蔵されるようになった経緯について記述しておく。これについては、竹内道夫氏の「尾崎放哉のことども」（平成四年十一月二十三日付『日本海新聞』）で触れているのでそれを引用して略記する。

本資料群の大半は、昭和三十七年に県立図書館の館蔵資料となっている。これらの資料が県立図書館に保管されるようになった経緯は次のようである。

昭和三十五年のこと、自由律鳥取湖の会の幹事を務めていた小林隆夫と古川一路の二人が名古屋に住む放哉の甥尾崎秀明を訪ねたが、その時秀明氏が放哉の遺品を鳥取に残しておきたいと申し出られ、二人が持ち帰った。そして、二年後の昭和三十七年四月七日の放哉の命日に風紋の会（湖の会が消滅し、放哉資料を引き継ぐ）より県立図書館に寄贈されたという（県立図書館の記録では美田初子氏より購入）。ただし、この時館蔵と資料となった資料目録に記された二点の資料「童子の放尿　半折　島丁哉」「録音テープ（尾崎秀明談話）」については目録に「返却」と記されており、尾崎家へ返されたものと推測されている。なお、尾崎秀明氏よりの寄贈目録は本人の直筆である。

※　この間の経緯については、竹内氏前掲を参照のこと。

資料群の特徴

次に資料群に含まれる資料の特徴についてまとめておく。第一は放哉関係の写真資料の豊富さである。特に放哉幼少時代からその成長の節目にあたる時代のものが含まれている。その中でも、家族写真、薫との結婚写真、朝鮮に渡っていた時代の写真などは、放哉に関する出版物には必ず利用されるものである。

この他の資料では、放哉危篤及び悔みの電報、放哉没後に荻原井泉水・杉本玄々子より尾崎並に宛てた書簡、放哉句碑除幕式の際の祭文・式辞などは、放哉の死亡前後の周囲の人の動きを知る上で興味深いものである。

放哉の肉筆としては、俳句二点が含まれている。また、木村緑平に宛てた放哉の書簡がある。この書簡は秀明氏からの寄贈とは別に館蔵となったものである。

村尾草樹旧蔵資料

本資料群の資料を収集した村尾草樹（一九一四～八三）は、本名を重雄といい、兵庫県豊岡市の出身である。村尾は俳人でもあり、放哉の顕彰と調査を勢力的に進め多くの関係資料を収集して

いる。本資料群の特徴は、放哉の自筆書簡・はがきが多く含まれていることである。そのほとんどは、放哉から木村緑平に宛てたものと、小倉康政・政子夫妻に宛てたものである。また、放哉調査の過程で関係者を尋ね、放哉の伝記を記述するに必要としたのであろう、細かいことを聞き取っている。それは、関係者から村尾草樹に宛てた書簡の内容によって推測できる。このほか、いくつかの貴重な写真類が含まれている。日本女子大学に通っていた時代の澤芳衛の写真や鳥取一中時代の放哉の旧友との集合写真など、尾崎放哉の生涯を語るためには不可欠の資料である。

村尾草樹はこうした資料収集と調査の集大成として昭和三十九年に層雲社より『放哉』を出版している。

古川幸雄旧蔵資料

所蔵の経緯

本資料群は、平成十二年に鳥取市在住の古川幸雄氏より当館にご寄贈いただいたものである。古川氏は、放哉が作品を発表した『層雲』の会員で、「一路」の俳号を持っている。先に上げた湖の会の代表的な人物で、昭和三十五年、三十六年頃には、鳥取大震災で荒れ果てた尾崎家の墓所の整備や放哉の生誕地を示す石柱の建立などの活動を精力的に行っている。

本資料群の形成は、放哉の恋人であった澤芳衛と『層雲』編集をしていた伊東俊二の交流に始まるが、その頃の伊東は京都市に居住している。二人の交流がいつ頃から始まるのかについて、『暮れ果つるまで』の著者小山貴子は、伊東の元に残された二人の写った写真の裏書によって、二人の出会いは文通ではなく昭和十八年頃には直接顔を合わせているとしている。澤家は、昭和十七年四月～十八年十一月の間京都の鹿ケ谷に住んでおり、その頃に伊東が芳衛のもとを訪れたのであろうという。もともと伊東は放哉を慕い、伯父の元を出奔し各地を転々としたのちの昭和十四年ごろ、小豆島の南郷庵に暮していたという。はっきりしたきっかけはわからないが、二人の文通が始まり、芳衛は伊東のもとに放哉とのことなどを書面に認めて送り続けるのである。また、芳衛のもとに残された放哉自筆のはがきや手紙、あるいは句稿なども資料として伊東に送っている。伊東は芳衛に尋ねたことをまとめいずれ出版する気持ちがあったようだ。しかし、それは果たされないまま、伊東のもとに形成された資料群は古川幸雄に渡されることになる。

小山前掲著によれば、古川が伊東のもとを訪れたのは平成になってからのようだ。そして、その時に古川は伊東よりこれらの資料を託されたのである。さらにこれは、小山貴子氏の資料収集の過程で「発見」され、放哉資料を鳥取に残したいという古川の強い希望により、当館に寄贈されたものである。

資料群の特徴

資料群としては、前記したように、澤芳衛が伊東俊二に送った書簡・はがき類が大きな比重を占めている。これらは、沢芳衛より見た放哉を取り巻く人間関係についての証言といえるもので

ある。また、先述したように、澤が伊東に送った放哉自身のはがき類や原稿・句稿が含まれている。前者は二次資料ではあるが、最も身近な人間が放哉との間に起こったことを記録したものとして貴重であるし、後者は放哉の創作や芳衛との関係を見る資料としては一次資料として重要なものである。とくに、芳衛に宛てた書簡（巻子）は、東京帝国大学の学生であった頃の放哉の考え方を知る上で貴重なものである。大学で勉強することの意味や将来の進路に悩む青年の姿が浮かび上がってくる。

　これらの資料をもとにしながらまとめられたのが小山貴子著『暮れ果つるまで』（平成十一年、春秋社）である。

おわりに

　鳥取県では、郷土出身の文学者を顕彰し、そのすぐれた作品に触れてもらうことをめざして様々な情報発信事業を展開している。尾崎放哉に関する講演会や作品展などはその一連の事業として企画された。当館でも、放哉の資料展示を実施し、また『郷土出身文学者シリーズ（二）』として小冊子を刊行した。本目録は、当館が所蔵する放哉関係資料の目録であるが、解説でも述べたとおり、その大半は既に研究者によって紹介されている。しかし、鳥取県の生んだ類まれな俳人の資料であることから、その全体像を紹介するために編んだ。これによって放哉への関心を少しでも高めることに寄与できればと考えている。

　なお、作成の過程で、尾崎放哉の研究者である小山貴子氏のご指導・ご助言をいただいた。深く感謝いたします。

凡例

一、本目録は、鳥取県立図書館所蔵の尾崎放哉関係資料を収録するものである。

一、資料名は基本的に原資料の表記に従った。資料名の表記がない資料については、〔 〕内に資料名を付した。

一、「全集」欄には『放哉全集』第二巻 書簡集 第三巻 短篇・随想・日記ほか（筑摩書房、平成十四年）の書簡番号および掲載頁を記した。巻数は丸数字で表した。

一、本資料目録および解説は、元鳥取県立図書館郷土資料課長北尾泰志が作成し、学芸員渡邉仁美が一部修正した。